



## 大学図書館の出版物

●  
加藤信哉

しばらくの間、昔語りにお付き合いください。著者が大学図書館に入職した四十数年前は、大学図書館の出版物は目録と図書館報が主でした。目録といっても予約雑誌目録がほとんどでした。図書館概要や蔵書目録を出版し、外部に配布している大学図書館は限られていました。

大学図書館が閉架式であった時代には、蔵書目録を印刷・出版することが利用者に対する図書館の大切なサービスと考えられていたと、当時先輩から聞いたことがあります。他大学の蔵書を調べるツールとしての冊子体の蔵書目録の価値は極めて高かったといえるでしょう。

図書館報について言うと、それはいうまでもなく、図書館利用者へ図書館の活動やサービスを伝える広報資料であり、図書館職員の研鑽の成果を発表する場という性格を持っていたものも少なくありませんでした。著者が担当した図書館報の構成は、巻頭言、エッセイ、資料紹介、会議や研修の参加報告、図書館日誌でした。発行予定の号の企画を立て、執筆依頼を行い、集まった原稿を割り付け、決裁を取り、印刷会社に渡し、上がってきたゲラ刷りの校正を複数回行い、当該号の納品

が終わると次の号の企画が始まるといった具合で、十二ページ立ての図書館報の発行は季刊が一杯でした。振り返ってみると、図書館報の編集に関わることによって曲がりなりにでも、校正や印刷や著作権を含む出版についての基礎知識や技術を学んだと感じています。

近年、図書館活動やサービスの広報は図書館ウェブサイト置き換えられ、図書館報の発行を中止した図書館もあります。図書館報の性格も変化し、総じて学生向けの編集になってきたようです。

一方、大学図書館は機関リポジトリやデジタルアーカイブ等の情報発信事業を行っています。これらの事業では(デジタル)情報を扱うため「発信」という用語が使われていますが、その実態は(印刷物の)「出版」と変わらないと考えます。

以前に比べると、大学図書館は印刷物の出版に関わるものが減ってきましたが、今までの出版活動を整理し、現在取り組んでいる情報発信事業にその知見と経験を継承すべきではないでしょうか。

(かとう しんや/国際教養大学)